

ミステリ読書案内

2022. 6. 13 発行元

第365号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

最近出た本の中から

新刊は順調に出版されている。デビューしたばかりの新しい作家の本を選びにくい、読み慣れた常連作家の最新作なら、安心してお薦めすることができる。今回もそんな4冊を取り上げてみることにする。

新刊書店での行動は？

新刊書店へ行く。まず単行本の平台へ。ミステリで一番目立つのは逢坂冬馬の『同志少女よ、敵を撃て』かな？ 本屋大賞を取ったこともあり、ロシアのウクライナ侵攻の時流に乗っていることもあり…。続いて単行本の新刊コーナー。中山七里、近藤史恵、菅田哲也…いろいろ並んではいるけれども価格が高いので買えない。残念、残念。

次は隅に追いやられてしまったノベルス・コーナー。西村京太郎が

出ないとなると益々魅力が薄れてくる。文庫本の平台。ここは必ず何かある。文庫本の最新コーナー。ここで5～6冊手にする。注意は既読の本を買わないこと。改題されている本もあるので、奥付などにも目を通す。「書下ろし」と表示してあれば安心して買える。

最後はライト系の文庫本のコーナーへ。最近、ここに引き付ける本があまり並ばない。相変わらず多いのが安易な「あやし系」だ。「妖怪に謎を解かせないでくれ！」という思いが浮かぶ。

山本巧次「乳頭温泉から消えた女」

4月に集英社文庫から出たばかりの新しいシリーズ。山本巧次も次々と新作を打ち出してくるが、今度はトラベルミステリの流れ。

北海道の積丹半島と秋田県の乳頭温泉が主な舞台。鉄道会社勤務の関係から、アリバイ・トリックの趣向かとも思ったが、その方向性は途中までだった。北海道の不動産会社の経理に関わる事件で、探偵役としてはリスクコンサルタントの仕事をしている円堂雅流(えんどうまさる)が登場する。乳頭温泉での女性の失踪事件を追い求め始めるのが発端。

山本ミステリとしてはやや盛り上がり方が今ひとつ。ミステリとしてよくあるパターンの内容で、設定が平凡なせいかもしれない。

深水黎一郎「虚像のアラベスク」

2018年に角川書店から出た本が5月に角川文庫になって出版された。帯に印刷してある「やられた！ 全てを裏切る超・どんでん返し!!」の文言に惹かれて買ってしまった。騙されるために読む本。

中編が2つ入っている。でも、1編目があるからこそ2編目が際立つという仕掛けにもなっている。1編目の『ドンキホーテ・アラベスク』は、バレエの公演に対する脅迫状に関する事件。警備に苦闘する海陸警部補の視点で描かれ、それを支えてくれる芸術探偵・神泉寺瞬一郎が登場する。舞台のどの場面で一大事が発生するかと思ってハラハラしていると…。予想外の展開に。2編目はさらに…。「何だこれは！」の話。

鳴神響一「網走サンカヨウ殺人事件」

3月に徳間文庫から出た新シリーズ。最近の鳴神響一は矢継ぎ早に新作が出てくる。全部を拾い上げるのが大変。今回は、警察小説の形を取りながらも全国各地を回る「旅情ミステリ」風の内容。

全国都道府県警察の問題点を密かに探るための組織「地方特別調査官」。その担当になったばかりの朝倉真冬は旅行系ルポライターと名乗って網走に飛ぶ。一年前に起きた女性写真家殺人事件の捜査が進まないことと、網走中央警察署の捜査本部の動きに疑惑が持たれたのが発端。民間人と偽っての活動なのでスムーズに進まない部分はあるものの、地元の協力を得ながら真相にたどり着いていく。

里見蘭「古書カフェすみれ屋とラン干部事件」

昨年11月に大和書房の「だいわ文庫」から出た本。里見蘭の作品としては『古書カフェすみれ屋と本のソムリエ』『古書カフェすみれ屋と悩める書店員』に続く3冊目になる。

「すみれ屋」のオーナーは玉川すみれ。脱サラしてシェフになり、絶品メニューが評判のカフェとなる。この店でアルバイトとして働いているのは森諸ほまり。彼女の視点で語られることが多い。この店の特徴は料理の出来が素晴らしいことにあるが、もうひとつは奥に古書スペースがあること。この古書店の店長が紙野貢という若者。カフェの来る客が持ち込んでくる謎や相談事を聞いて解決に導くアームチェア・ディテクティブにプラスして、紙野君がお薦めの本を提示するのがポイント。本の知識が半端でない。今回は4編を収録している。第一話『割り切れない紳士たち』は婚活の流れの中で楽しくデートした後送られてくる相手からの辛辣なメールの謎。その裏に潜んでいるのは…。